

文系の大学生が卒業研究へ向き合う過程の検討

【研究目的】

大学生の卒業研究は、学生が自分なりの目的や動機に基づいて取り組み、人として成長することに意義があるとされている。しかし実際には、学生が卒業研究に主体的に取り組むことに困難を感じる事が知られている。本研究は、文系の大学生の中でも卒業研究に積極的な意義を見出した者の体験に焦点を当て、1) 卒業研究に取り組む過程でどのような困難を経験したのか、2) どのように困難に対処したのか、3) 卒業研究をどのような経験として意味付けているかを検討した。

【研究対象者・研究方法】

1) 卒業から1~3年経つ者であること、2) 卒業論文の作成・提出が卒業要件として課されていたこと、3) 卒論の作成に、自分なりの達成感を感じたことを条件として研究協力者を募った。4名を対象に、インタビュー調査を実施し、インタビューの内容は録音した上で逐語録に起こし、ナラティブ分析を行った。

【分析結果・考察】

インタビュー分析から研究対象者が、(1)研究の進捗、(2)研究と別の活動の両立、(3)研究の技術的な側面、(4)研究を取り巻く人間関係、の四つの要因に対してストレスを感じてることがわかった。

困難への対処は、①目標を遂行するために問題解決を試み、他者に協力を依頼する、②目標達成のため自分の力で問題解決を試みる、③問題解決を問わず苦痛に耐える、④目標を下方修正して苦痛を回避する、の四つに分けられた。インタビュー調査では、同じゼミの学生や教員に協力を依頼することで困難に対処するケースが多く見られた。

研究協力者は卒業研究を、自己確立や自己信頼、考える力を得た経験として意味付けており、卒業論文を提出することで達成感を得ていた。しかし、研究活動に自分なりの目的を持たない場合は、積極的な意義は見出されていなかった。研究活動に自分なりの目的を持つ場合も、問題を解決できなければ、積極的な意義は見出されなかった。研究対象者のゼミに対する所属意識が高い場合は、問題解決のための対処行動がとられる傾向にあったことから、ゼミの学生が互いに協力して研究に取り組むための環境づくりの重要性が示唆された。くわえて、学生が卒業研究に積極的な意義を見出すために、研究に対するフィードバックが重要であることが示唆された。

ソーシャルメディアでのトラブルへの向き合い方の検討 —中学生時の体験に焦点を当てて—

研究目的

本研究では、中学生がソーシャルメディア上でのトラブルにどう向き合い、どのように解決に至ったのかを検討した。具体的には、1) ソーシャルメディアが関わるトラブルはどのようなものだったのか、2) トラブルの中でどのような心理的ストレスがあったのか、3) トラブルはどのように収束したのか、について検討した。

研究対象者・研究手法

研究対象者は、中学生時にネット掲示板、LINE、Twitterでのトラブルの経験のある大学生である。何らかのサポートを受けて事態解決に至った経験を持つ方で、トラブルによって学校生活に支障がなかったこと、及び現時点でトラブルは解決しており、かつトラブルによるストレスも解消されていることを条件とした。男女は問わないこととした。研究の過程で研究協力者を見つけることに困難が生じたため、当事者ではないが他者が介入してトラブルを解決したという経験をした方や、当事者ではあるが他者が介入しなかったというトラブルを経験した方にもインタビューを行った。

合計4名の方に30分～60分程度の半構造化インタビューを行い、ナラティブ分析を行った。

分析結果・考察

中学生が経験したソーシャルメディアが関わるトラブルは、無断で個人情報やネット上に載せられたケースと、LINE上でのいじめという二種類があった。トラブルの原因に関しては、逆恨みや、部活のポジションをめぐる喧嘩であることが明らかになった。被害者が、最終的に他者に相談を持ちかけた事例も見られたが、他者の目を気にして、トラブルをこれ以上大きなものにしたくないという気持ちから、自ら相談を持ちかけないケースも見られた。

被害者は、ネット上で起きたいじめから抜け出したいという気持ちと、他者にネット上でのトラブルを知られたくないという気持ちの間で葛藤しており、大きな心理的ストレスを抱えたことが考えられる。インタビューの語りからは、加害者が怒りや嫉妬に駆られて、ネット上でいじめに至り、時には周囲を巻き込んで、被害者を心理的に追い込んでいることが明らかとなった。加害者はソーシャルメディアを感情の発散の場にしていただけと考えられる。ソーシャルメディアでのトラブルは大人の目につきにくく、中学生がトラブルの被害者である場合、どのように解決のためのサポートを得るべきなのか、判断ができない様子が窺えた。

他者の介入により話し合いの場が設けられたケースにおいては、トラブル発覚から短時間で問題が収束したことが分かった。本研究からは、大人の目につきにくいソーシャルメディアに中学生が巻き込まれるトラブルにおいては、被害者の親や友人、教員の介入が解決のきっかけになることが分かった。

通信制高校生の進路選択：
不登校経験者の体験に焦点を当てて

【研究目的】

本研究では、高校生の時に不登校を経験し、その後通信制高校へ転入した方の体験に焦点を当てた。不登校経験者が通信制高校をどのように経験したのか、そしてどのように卒業後の自分の進路を見出したのかを検討した。

【研究対象者・研究手法】

本研究では、高校生の時に不登校が原因で通信制高校へ転入した方のうち、通信制高校卒業時点で主体的に何らかの進路選択をした、現在 20 代の方を対象とした。本研究では、「何らかの進路選択」を、専修学校・専門課程入学、大学進学、就職のいずれかとした。3 名に 30～60 分程度の半構造化インタビューを実施した。インタビューは録音した後、逐語に起こし、ナラティブ分析を行った。

【分析結果・考察】

当事者の語りから、3 名とも全日制の高校では、勉強や受験に対する圧力を強く感じていた。また、人間関係が原因で、精神的に疲れていた様子も窺えた。しかし、通信制高校ではそれらの圧力等から解放され、通信制高校での体験をポジティブに捉えているという結果となった。通信制高校では、時間的・精神的な余裕が持てたことから、3 名とも全日制の高校で感じた精神的な疲れを癒すように日々過ごしていた。また、在籍する生徒の背景や年齢が様々なことから、人の多様性に寛容になった様子が見受けられた。通信制高校への転入当初、3 名とも自分が不登校を経験したことや、通信制高校へ転入したことをネガティブに捉えていた。しかし、通信制高校での生活を経て、考え方に変化が見られた。通信制高校では、不登校や留年経験のある生徒が多く在籍していたことから、それらが気にならない環境であったと考える。

卒業後の進路は、3 名とも大学進学であった。通信制高校では、卒業後に大学進学する者が少数という現状にある。全日制の高校と比較して、受験勉強に困難さを覚えた者が 2 名見受けられた。卒業後の進路は、教員免許取得を目指したものが 1 名、地域福祉心理学を専攻した者が 1 名、心理学を専攻した者が 1 名という結果であった。

通信制高校を体験した者の語りから、不登校を経験した生徒が、学校に求めているものが、2 点明らかになった。一つは生徒が自由に過ごせる時間を確保することであり、もう一つは勉強・受験に対して過度なプレッシャーを感じない環境である。

全日制の高校では、定期テストや受験勉強に追われることから、生徒は自由な時間を確保することが難しい。全日制の高校の生徒は、勉強に追われてストレスを発散できない状況で、さらに学校から、成績や受験に対してプレッシャーを掛けられているということが、3 名の語りからは窺えた。全日制の学校が、すべての生徒にとってより良い学びの場になるためには、不登校生徒が学校に求めているものを理解し、改善していく必要があると考える。

自製の効いたスマホゲーム利用についての検討：
男子大学生の体験型 RPG スマホゲーム利用に焦点をあてて

【研究目的】

本研究では、男子大学生の自制を通じたスマホゲーム利用を検討した。具体的には、1) スマホゲームを始めた経緯、2) 自制してスマホゲームを行うに至った経緯、3) 現在の利用方法と考え方について検討した。

【研究対象者・研究手法】

1) 大学生で、体験型 RPG のスマホゲームを利用する男性、2) スマホゲームを始めて3年以上が経過している方、3) 今は自制してスマホゲームを利用している方、4) 1日1時間未満の利用をしている方、5) 月に5000円未満の課金をして利用している方を対象とした。対象者3名に半構造化インタビューを行った。録音したインタビュー内容を逐語録に起こし、ナラティブ分析を行った。

【分析結果・考察】

体験型 RPG スマホゲームの利用において、男子大学生が自制に至った経緯から、現在の利用方法の在り方が明らかになった。1) スマホゲームの開始時期については、中学生時代でパズドラやモンスターの一大ブームが起こった時期より本格的な利用が行われていた。2) スマホゲーム利用の自制は、学業(高校受験)との両立で、現実的に難しいことが理由となっていた。3) 現在の利用方法については、プログラマーがゲームランクの首位を独占するピラミッド構造が不変のものとなりつつあり、一般の利用者は限界を感じていることが明らかになった。インタビュー対象者は他の趣味を探したり、ゲームの数を増やして課金額を増やさないようにするといった工夫をしていた。

スマホゲームは、なくてもよいがあると嬉しいものであると捉えられている。課金額も結果的に抑制されたものとなっていた。全体として自分の中で一線を引き、その範疇を何としても超えないように注意を払う様子が窺えた。

Instagram の利用の変化

－20 代女性の SNS 疲れに焦点を当てて－

【研究目的】

本研究では、20 代女性が Instagram を利用する中で感じた SNS 疲れに焦点を当て、SNS 疲れを感じた後、Instagram の利用の仕方をどのように変えたのかを、インタビュー調査を用いて明らかにした。具体的には、1) Instagram を始めた当初はどのように利用していたのか、2) どのような SNS 疲れを感じたのか、3) SNS 疲れの経験から、Instagram の利用をどのように変えたのか、4) 現在 Instagram をどのようなツールであると考えているのか、に関して検討した。

【研究対象者・研究手法】

Instagram を 3 年以上、毎日 1 時間以上投稿または閲覧のために利用していた方で、SNS 疲れを感じて、現在利用の仕方を変えている 20 代女性の方を対象とした。利用方法変更後の使用時間については、当事者が決めたルールによって異なると考えられるため、特に定めないこととした。対象者 4 名に 50～90 分程度のインタビューを行った。インタビューは同意を得た上で録音し、逐語分析はナラティブ分析を用いた。

【分析結果・考察】

当初の利用状況について、写真や動画を思い出として残すことや、写真の加工・編集など投稿する過程を楽しみながら発信を頻繁に行っている場合と、投稿に対する苦手意識から閲覧を中心に行っている場合の 2 パターンであった。しかし、投稿が苦手であるにもかかわらず、周りに合わせて投稿を行う場合も見られた。

Instagram の情報量や第三者との繋がりから、当事者は周り自分との比較や投稿の内容に気を遣うことに疲れを感じていた。自ら閲覧を制限したり、サブアカウントを設けることで気を遣わない投稿を始めたりと、自分に合った利用方法を模索していた。

利用方法を変更して以降は、4 名全員が閲覧を主な目的として Instagram を利用していた。他者の投稿内容と自分自身をうまく切り離し、自分に有益な情報のみを取り入れる術を身につけ、現在では、閲覧によって得られる情報の豊富さに Instagram の最大の魅力を感じるようになっている。発信に関しては、サブアカウントを用いて現在も発信を続けていることから、Instagram は当事者にとって、「情報共有欲求」や「承認欲求」を満たすツールとして必要不可欠な存在となっていることが判明した。

「推す」という活動の検討

-男性アイドルを応援する女性ファンの心理-

【研究目的】

本研究では、男性アイドルを応援する女性ファンの心理を、「推す」という活動に焦点を当てて検討した。具体的には、1) 推し活動の歴史、2) ファンコミュニティの様相、3) 「推す」という活動から何をj得ているのか、について明らかにした。

【研究対象者・研究手法】

地下アイドルといった、ファンとの距離が比較的近い男性アイドルのファンをしている女性を対象とした。ライブやイベントに定期的に足を運んでいるファンの方で、特定のアイドルのファンを3年以上しており、SNS上で他のファンと繋がるコミュニティに属している方を研究対象とした。対象となる方の年齢は、時間的、金銭的な自由度の高い20歳代の方とした。4名に半構造化インタビューを行った。録音したインタビューから逐語録を作成し、ナラティブ分析を行った。

【分析結果・考察】

男性地下アイドルを推す活動は、青年期の女性にとって活力となり、日々のモチベーションとなっていることが明らかになった。推し活動は、仕事を頑張る原動力や、毎日の生活の活力となっており、推しの存在が心の拠り所になっている様子や、生活の一部になっている様子が窺えた。「推し」は、元気をくれる存在あるいは恋人が与えてくれるような癒しをくれる存在と捉えられていた。

一方で、推し活動を行っている青年期の女性は、推し活動に熱中しつつも、自らの活動を客観視している面も見受けられた。給料の大半をライブや特典会に費やしてしまうため、推しの応援をやめられるならやめたいという葛藤を語る者もいた。また、自らが男性地下アイドルを推す当事者になった現在も、写真や会話といった一瞬で終わってしまうことにお金を払うことに対して「もったいなさ」を感じ、男性地下アイドルを応援するということに対する後ろめたさ抱えている様子も窺えた。推し活動は、いつやめてもおかしくないものであると考えているため、周りに左右されず、自らのペースで推しを応援しているような推し活動の形も見受けられた。

体験の語りから、推し活動は青年期の女性にとってエネルギーを注ぐ活動として機能していることが判明した。アイドルとファンの距離が近く、双方向のコミュニケーションを取ることができる地下アイドルの特殊性ゆえの、推し活動をやめられない、推し活動の後ろめたさといった悩みや葛藤が見られた。地下アイドルのファンは推しから自分の存在を認知されており、アイドルとファンの間で親密な人間関係を作り出しているといえる。